

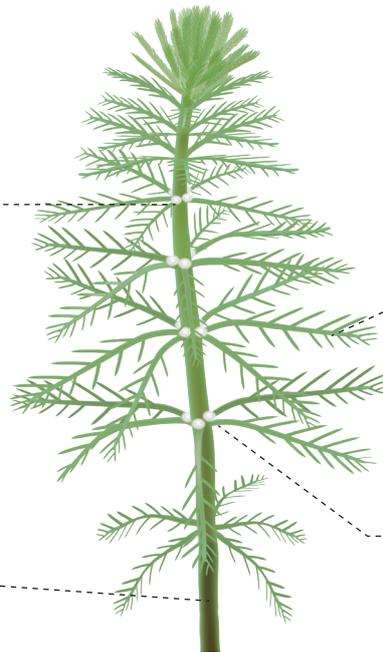
オオフサモ

Myriophyllum aquaticum (Vell.) Veldc.

特定外来生物
国：緊急対策外来種
日本ワースト100
県：重点対策外来種
(リスト p.23)

雌株しか確認されていない
ため結実しない
花期：5～6月

茎：太さ 5mm 程度
しばしば赤みがかかる



葉は鳥の羽のように見える羽状葉

1か所から車輪状に
5～6枚の葉がつく
(5～6輪生)

生態的特徴

多年生の抽水植物
根茎は水中を横走り大群落を形成する
茎断片から繁殖する
九州では、冬季も地上部が枯れない
種子繁殖は行わない

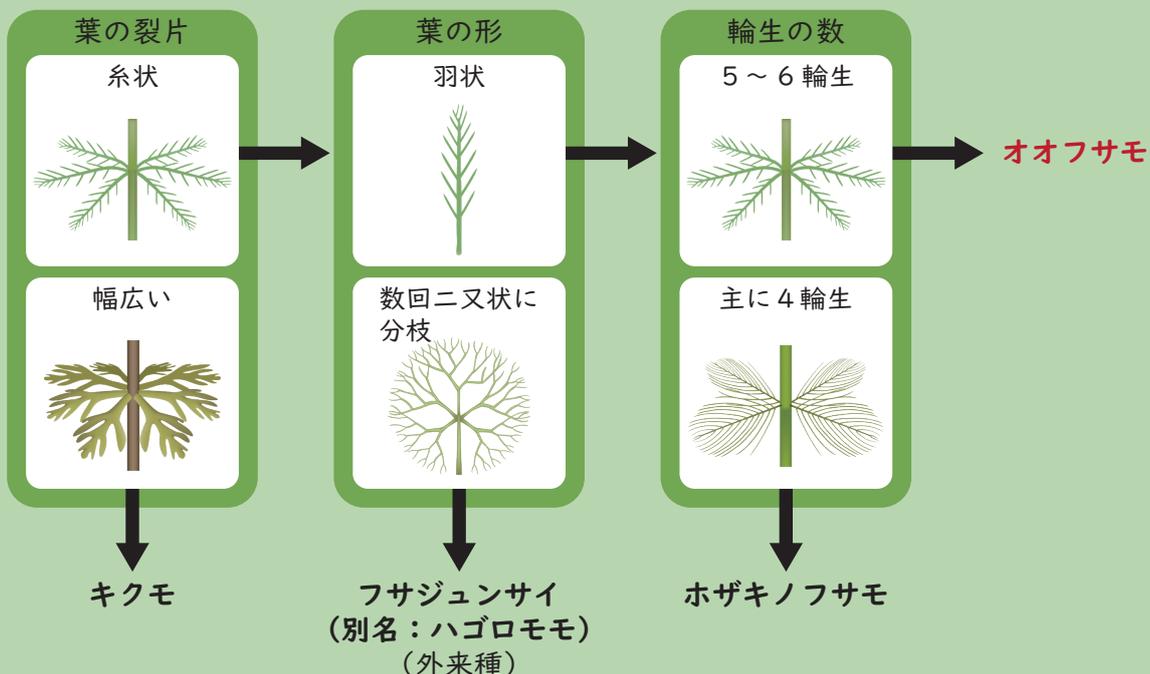
生育環境

河川、クリーク、水路、ため池、池沼、湿地

影響・被害

在来種（水生植物）との競合、通水阻害

類似種との見分け方



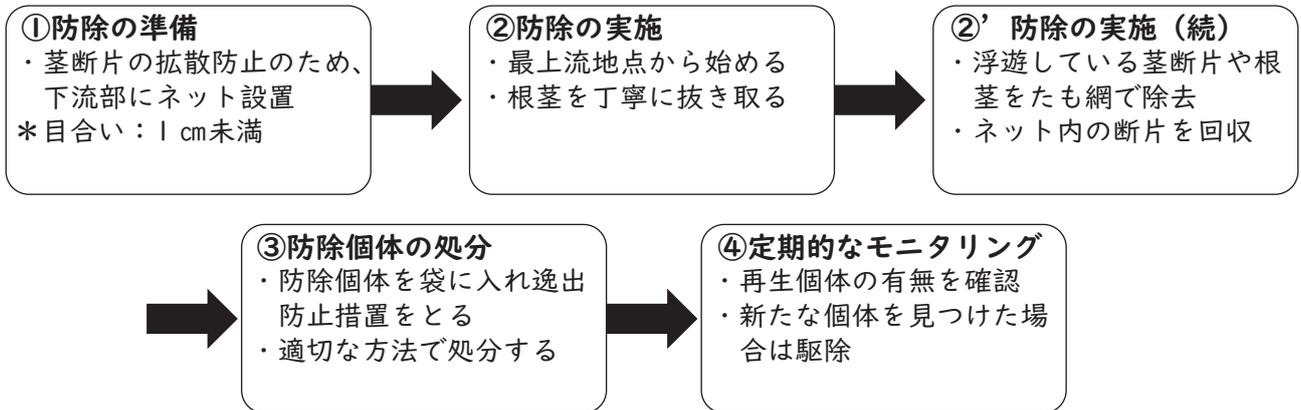
防除方法

*漁業権漁場では、漁業協同組合と十分に相談の上で計画する。
また、場所、方法等によっては防除を実施することができない場合があるため、福岡県環境部自然環境課または各市町村に問い合わせる

抜き取り

一般的に行われている防除方法であるが、ちぎれやすく取り残しが多いため、取り残しの確認を行うことが重要

防除効果	○	高い防除効果があるが、根茎が残っているとすぐに再生する
費用・労力	△	重労働であり大面積での作業は困難
その他	△	茎断片が流下して分布拡大しないように注意する必要がある

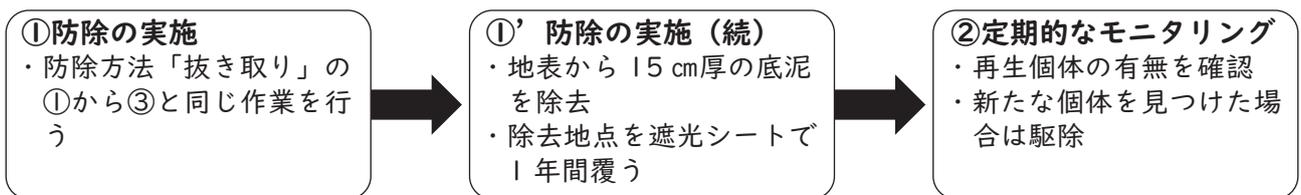


POINT 茎や根茎はちぎれやすく再生能力が高いため、毎年駆除する

抜き取り＋底泥除去＋遮光

抜き取りに加え、取り残した根茎を除去するための底泥除去及び茎断片を枯死させるための遮光を組み合わせた方法

防除効果	◎	高い防除効果があり、小面積における根絶事例がある
費用・労力	×	極めて重労働である
	△	遮光シートの購入費用が必要
その他	△	遮光シートの設置は、在来種への影響が懸念されるため、注意が必要



防除に適した時期

夏季（7～9月）。春から夏にかけて地下部に蓄えた養分を使って成長するため、地下部の養分が減少した時に防除を行うと、その後の再生を抑制することができる。



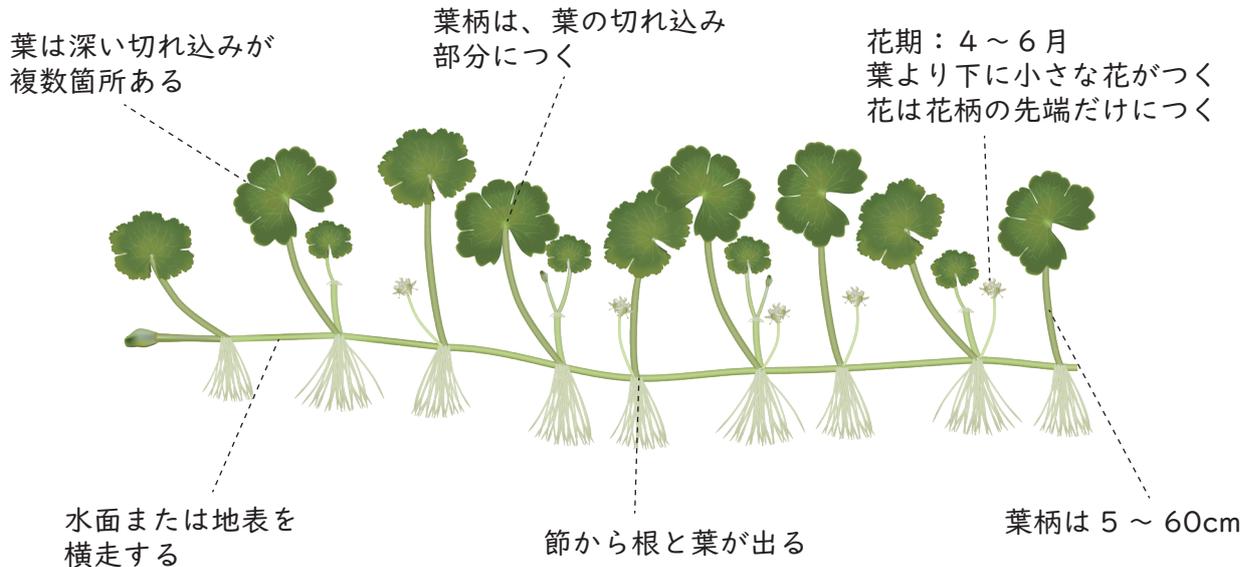
* 抜：抜き取り、抜泥光：抜き取り＋底泥除去＋遮光

セリ科
(ウコギ科)

ブラジルチドメグサ

Hydrocotyle ranunculoides L.f.

特定外来生物
国：緊急対策外来種
県：重点対策外来種
(リスト p.23)



生態的特徴

多年生の浮葉植物または抽水植物
成長が早い(1日最大20cm程度)
マット状に生育し水面を覆いつくす
節を含む茎の断片から再生・繁殖可能
茎は切れやすく、容易に切断されて分散する
種子繁殖は行っていないと考えられる
(*福岡県では成熟種子は未確認)

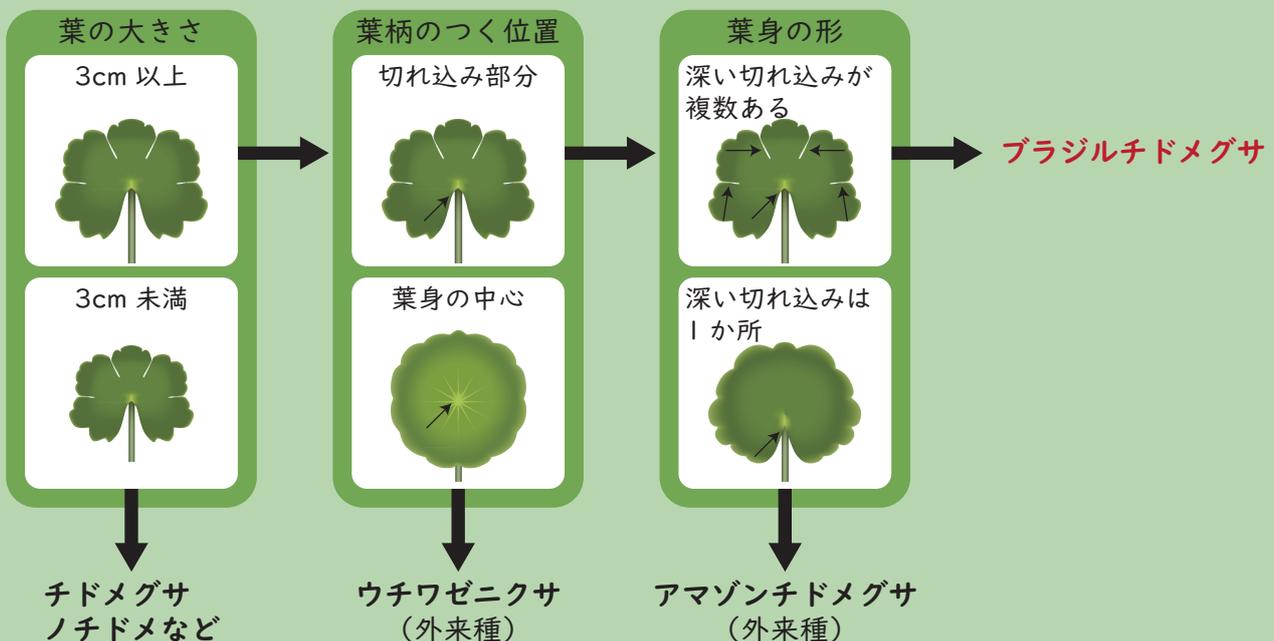
生育環境

クリーク、河川、水路、ため池

影響・被害

在来種との競合、水生動物の生息環境悪化、
通水阻害

類似種との見分け方



防除方法

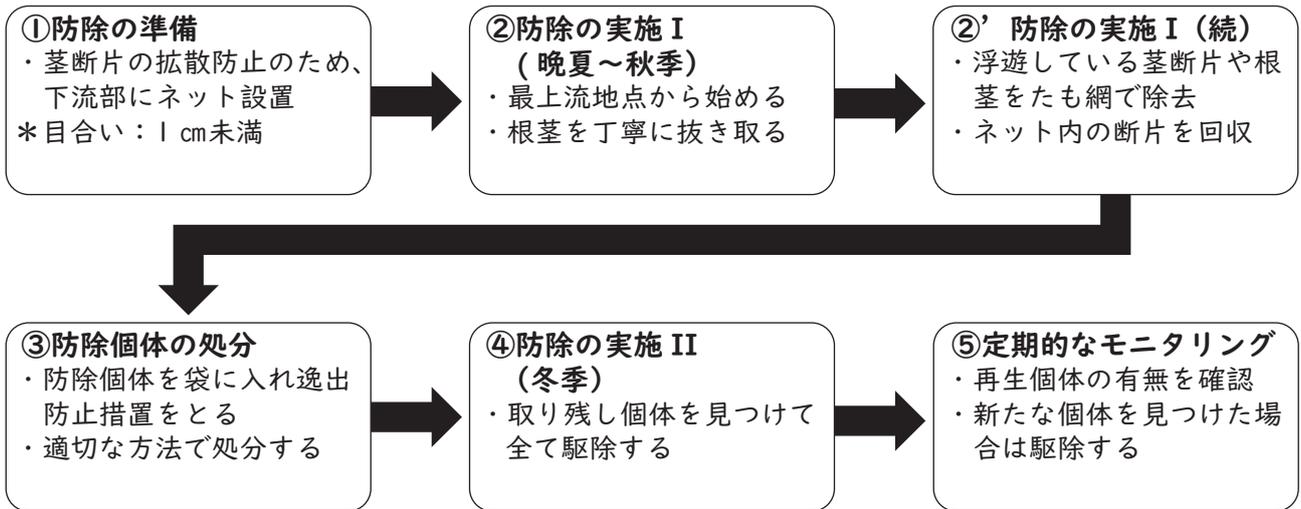
*漁業権漁場では、漁業協同組合と十分に相談の上で計画する。
また、場所、方法等によっては防除を実施することができない場合があるため、福岡県環境部自然環境課または各市町村に問い合わせる

抜き取り

一般的に行われている防除方法であるが、ちぎれやすく取り残しが多いため、取り残しの確認を行うことが重要

防除効果	○	高い防除効果があるが、根茎が残っているとすぐに再生する
費用・労力	△	重労働であり大面積での作業は困難
その他	△	茎断片が流下して分布拡大しないように注意する必要がある

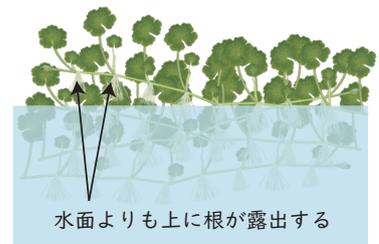
<二段階防除法>



POINT 防除時期を見極めることで効果的・効率的に駆除することができる
 ・ 個体によっては夏季に枯死が発生するため、少ない労力で駆除することができる
 ・ 冬季は周囲の植物の葉が枯れるため、常緑のブラジルチドメグサを見つけやすくなる

夏季に発生するブラジルチドメグサの枯死

ブラジルチドメグサは、茎葉が何重にも積み重なるように成長するため、繁茂している個体は、茎葉が空気中を横走するようになる。これらは、根が水面よりも上に露出しているため、連続した猛暑日にさらされた場合、水ストレスにより枯死する。この部分的な枯死は、その後2週間ほどかけて個体全体に波及し、大規模な枯死へと発展するケースも見られる。しかし、個体サイズは小さくなるものの完全には死なないため、再繁茂する前に駆除することが効率的な方法といえる (p.52～53 参照)。



防除に適した時期

晩夏から冬季。ただし、個体が小さいうちに駆除することが最も重要であるため、通年監視し、見つけ次第駆除することが重要である。



* 抜：抜き取り

ブラジルチドメグサの特徴

成長特性

(1) 成長特性

ブラジルチドメグサは浮葉～抽水植物で、個体が小さい時は葉が水面に浮く形で成長する。大きくなって葉が増え、光を受けるために葉柄が伸長し水面よりも高い位置に葉がつくようになる。

また、乾燥耐性があり、陸地でも湿った場所であれば生育することができる。陸地では、葉柄が短く小さい葉をつけるが、葉からの水の蒸散量を減らして、乾燥に耐えるためと考えられる。

(2) 成長速度

ブラジルチドメグサは成長が速く、1日最大20cm程度、2か月で10m程度伸長するとされている。筑後地域クリークにおいても、春先に定着した茎の断片が、2か月間で広く水面を覆っていく様子が観察された。

また、茎は、他の茎の上に積みあがるように伸長し、何層もの階層構造を発達させ、最上部の茎は、水面よりも高い位置を横走するようになる。



葉や茎は、水面を横走しながら成長するが、葉が密生すると葉柄が伸長し、大きなものは葉柄が50cm以上になる



水位が下がって水中から出てしまっても、地面が湿っていれば、生育し続けることができる



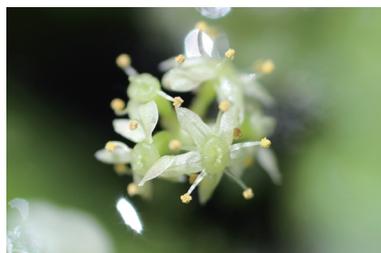
ブラジルチドメグサの植被の推移。

(左) 2019年4月13日、(右) 2019年6月14日

繁殖特性

ブラジルチドメグサは、種子繁殖と栄養繁殖の両方を行うことが知られている。しかし、本県では、開花及び未成熟果実は観察できるものの、成熟した果実は一切観察できていない。果実が成熟に至らない原因はわかっていないが、本県では、種子繁殖は行っていないと考えられる。

一方、栄養繁殖力は非常に高く、節（根や葉が出る場所）が含まれていれば、1cmの断片でも再生し増殖することが可能である。ブラジルチドメグサの茎は切れやすく、水流等で切断された茎の断片が水流に乗って分散されることで分布を拡大していると考えられる。



ブラジルチドメグサの花と未成熟果実



根と葉が出る部位を節という。この部位を含んだ茎の断片が水流に乗って分散されているのが観察される

植被の増減とその要因

大繁茂したブラジルチドメグサの防除には、重機が必要となり、多額の費用がかかることとなる。そのため、できる限り個体サイズが小さいうち、つまり侵入初期に防除することがとても大切である。

一方、ブラジルチドメグサは、夏季に大規模な枯死が発生し、個体サイズが小さくなるのが、たびたび観察されている。枯死の発生要因について調査したところ、水面よりも上に露出した茎葉や根が、連続した猛暑日にさらされることで、強い水ストレスがかかり枯死しているということが明らかとなってきた。このことは、ブラジルチドメグサの繁茂状況と気温の情報から、枯死の発生を予測することが可能であり、効率的に防除を進めることができることを示している。

また、大雨後にも物理的な損傷によって枯死が発生することが観察されているため、このような枯死の機会を捉えることが、ブラジルチドメグサの防除には重要であると考えられる。



重機によるブラジルチドメグサの防除の様子



夏季の大規模枯死の様子。枯死直後は植被が大きく減少するが、生存していた断片から再繁茂する様子が観察された。a) 7月16日、b) 7月30日、c) 8月21日、d) 9月2日

防除コストと防除効率

筑後地域クリークで防除を実施したところ、374m²のブラジルチドメグサを防除するのに、約23人・時間のコストが必要であった。これよりも大面積の場合や1日の労働時間が長くなった場合には、防除効率はさらに低下することが予想される。

また、冬季に取り残しを除去し、経過観察を行ったところ、外部から新たに侵入してくるまでの数年間は、一切生育は確認されなかった。このことは、二段階防除による駆除と外部からの断片の侵入防止を行うことで、地域根絶が可能であることを示している。



秋季における防除の様子。防除実施前（左）と防除作業中（右）



冬季における防除の様子。冬季は周囲の植物の葉が枯れるため、取り残したブラジルチドメグサの葉を見つけやすくなる

オオキンケイギク

Coreopsis lanceolata L.

特定外来生物
国：緊急対策外来種
日本ワースト100
県：重点対策外来種
(リスト p.23)

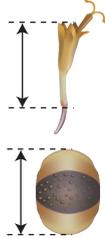
花びら（舌状花）の先は
4～5つに分かれる
花期：5～7月

葉は茎の下半分に集中し、
花茎が相対的に長い

高さ：30～70cm

花の中心部（筒状花）
花冠長：6.0～7.5mm

果実（瘦果）
果実長：2.6～4.0mm



2～5の小葉または
へら型の葉をつける



茎は根元から
束になって生える

花冠長と果実長は、近縁種ホソバ
ハルシャギクとの識別に重要

*ホソバハルシャギク
花冠長：3.3～4.8mm
果実長：2.0～3.0mm

生態的特徴

多年生の陸生植物
道端や河原などに、しばしば大群落を形成する
根茎が残っているとすぐに再生する
種子の生産量が多い（結実は6～9月）
永続的埋土種子を作る（最大2,000粒/m²）
埋土種子の寿命は2～13年

生育環境

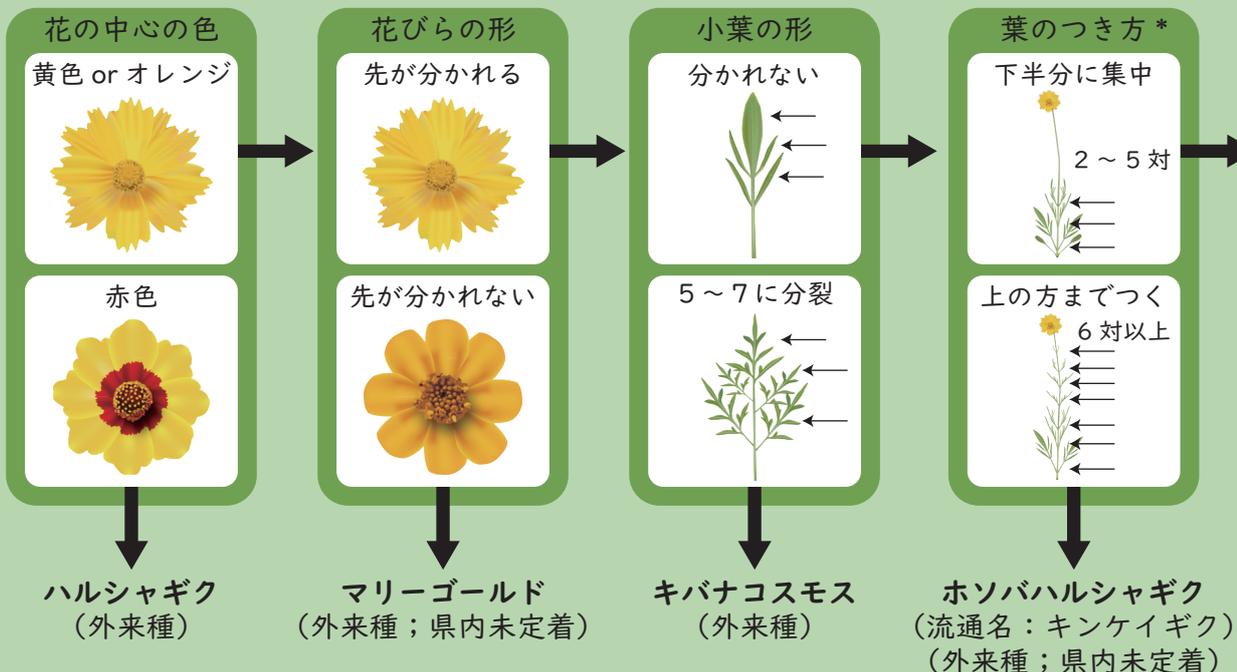
道端、空地、荒地、河川敷、堤防、人家周辺、
道路法面、海岸砂浜、海岸埋立地

影響・被害

在来種との競合

類似種との見分け方

*例外も多いため、花や果実を
含めて総合的に判断する



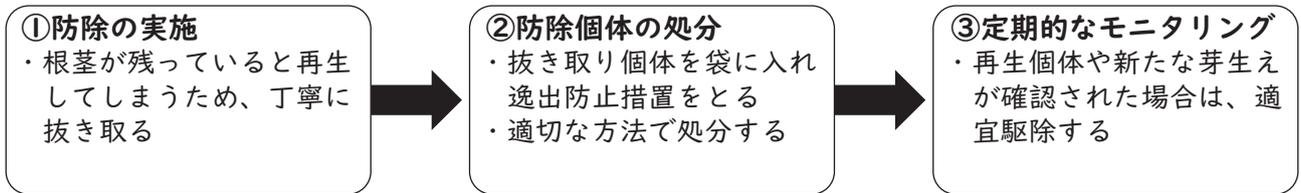
防除方法

*場所、方法によっては防除を実施することができない場合があるため、福岡県環境部自然環境課または各市町村に問い合わせる

抜き取り

最も効果的な防除方法。根茎を丁寧に抜き取ることで、個体数（株数）を減らすことができる

防除効果	○	高い防除効果があるが、根茎が残っていると再生する
費用・労力	△	多大な労力を要する
その他	-	特になし



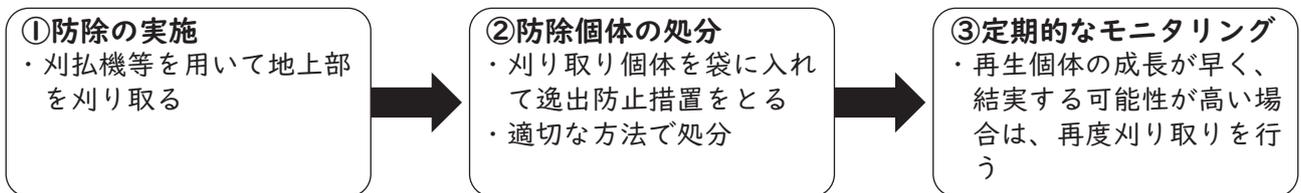
*土壌がかく乱されることで、土壌中の種子が発芽する可能性大

POINT 再生個体及び新たな芽生えが発生しなくなるまで複数年間、駆除を継続する

刈り取り

結実前に実施し種子の拡散を防ぐことで、分布拡大を防止する方法。ただし、個体数を減少させる効果はほとんどない

防除効果	○ △	分布拡大防止効果が期待される 個体数の減少効果はない
費用・労力	○	労力は少ない
その他	△	在来種と一緒に刈り取ることで悪影響を及ぼす



*ロゼットで識別が可能な場合は、越冬中のロゼットを刈り取ることで翌春の開花数を減少させることができる

POINT 毎年駆除を継続する

防除に適した時期

種子の拡散を防止するために、花の咲き始めの5月上旬から種子が成熟する前の6月までが最も適している。結実後に防除を行う場合は、種子がこぼれ落ちないようにすることが重要である。また、刈り取りは、再生個体の開花状況に応じて複数回実施することが望ましい。



* 拔：抜き取り、刈：刈り取り

ミズヒマワリ

Gymnocoronis spilanthoides
(D.Don ex Hook. et Arn.) DC.

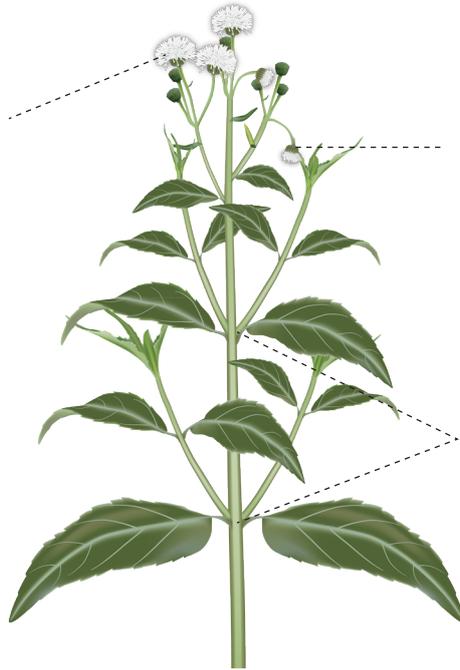
特定外来生物
国：緊急対策外来種
県：重点対策外来種
(リスト p.24)

花（頭花）：直径約 1cm
花期：6～11月

花は咲き終わると
下向きになる

高さ：0.5～1.5m

節：水につかると根が出て
新たな茎が立ち上がる



生態的特徴

多年生の抽水植物
成長が速く短期間でマット状に生育
茎の断片や葉片から再生・繁殖可能
種子繁殖を行う
アレロパシー活性を有する

生育環境

クリーク、水路、河川

影響・被害

在来種（水生植物）との競合、水生動物の生息環境悪化、通水阻害

類似種との見分け方

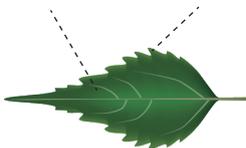
ミズヒマワリ

- ①葉の毛 : ない
- ②葉の縁 : 低い鋸歯
- ③花の終わり : 下を向く



ヌマダイコン

- ①毛はある
- ②粗い鋸歯



③下を向かない



昆虫を引き寄せる魅惑の花

ミズヒマワリの花は、昆虫類（チョウ、ハエ、アブ等）を非常に強く誘引することが知られている。また、花にピロリジンアルカロイドを含むことから、季節による長距離移動（渡り）をするチョウとして有名なアサギマダラが吸蜜することでも知られている。

誘引力が強いミズヒマワリの繁茂は、周辺の在来植物から訪花昆虫を奪うことになり、在来植物の受粉が十分に行われなくなる可能性があることが懸念されている。外来種の影響は、直接的なものだけでなく、間接的に作用する場合もあり、その影響の程度については注意深く見ていく必要がある。

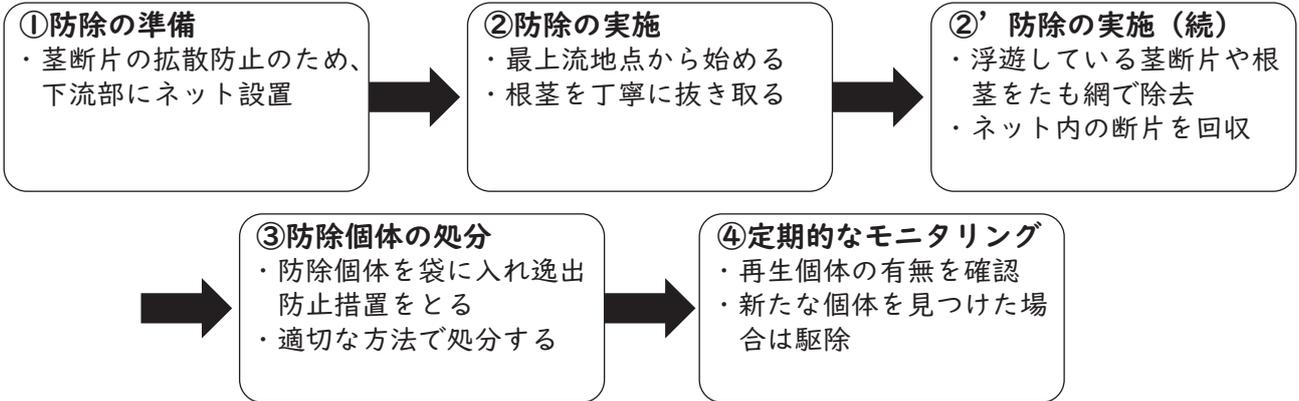
防除方法

*漁業権漁場では、漁業協同組合と十分に相談の上で計画する。
また、場所、方法等によっては防除を実施することができない場合があるため、福岡県環境部自然環境課または各市町村に問い合わせる

抜き取り

一般的に行われている防除方法であるが、ちぎれやすく取り残しが多いため、取り残しの確認を行うことが重要

防除効果	○	高い防除効果があるが、根茎が残っていると再生する
費用・労力	△	重労働であり大面積での作業は困難
その他	△	茎断片が流下して分布拡大しないように注意する必要がある

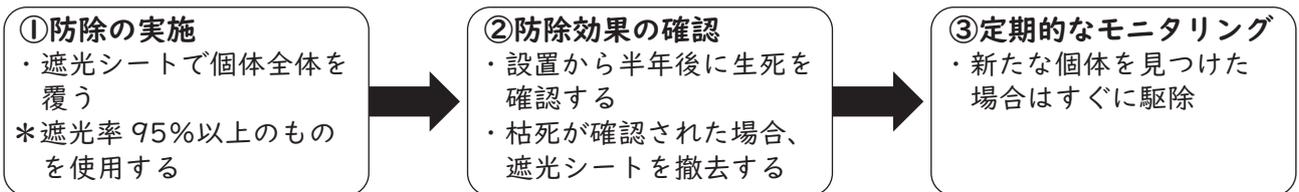


POINT 茎や根茎はちぎれやすく再生能力が高いため、毎年駆除する

遮光

遮光シートで覆い光合成を阻害することで枯死させる方法

防除効果	-	半年間で枯らすことができるとされているが詳細は不明
費用・労力	△	遮光シートの購入が必要
その他	-	大阪府立環境農林水産総合研究所のホームページに記載があるが、詳細不明



*2 か月間の設置：地上部の枯死
半年間の設置：根も枯死

防除に適した時期

春季（4～6月）または冬季（12～3月）。冬季は、霜により葉が枯死し、個体が縮小する可能性があることや繁殖防止の観点から、春季の防除が効果的・効率的である。また、冬季は成長が抑制され植被が縮小するため、効率的な防除が期待できる。



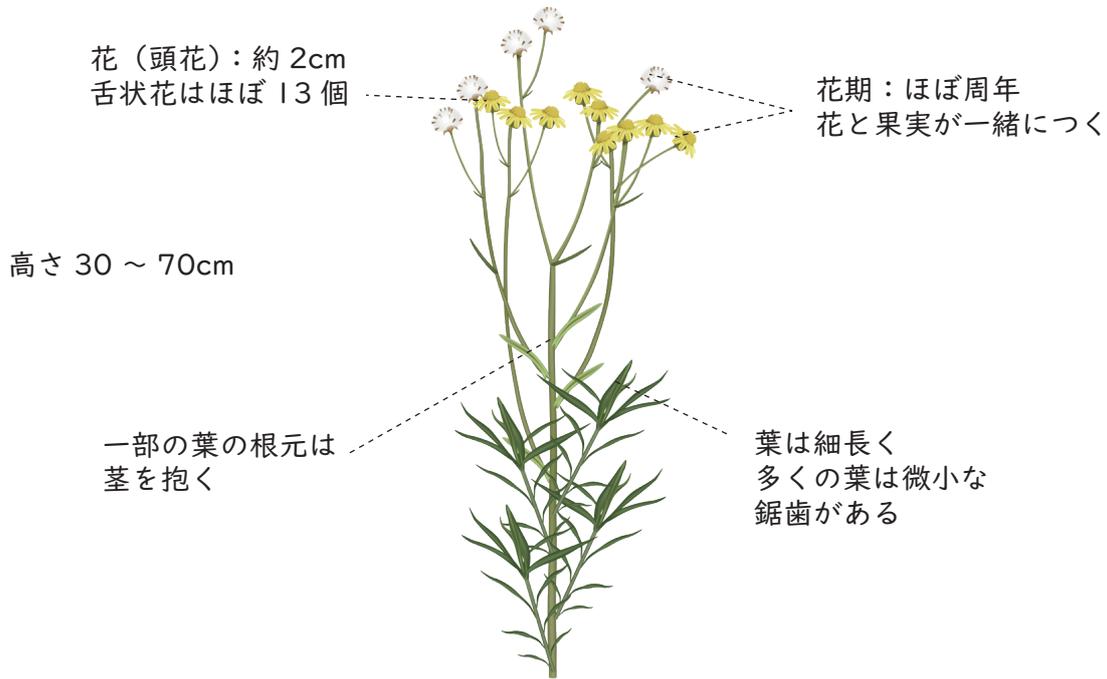
* 抜：抜き取り、光：遮光

キク科

ナルトサワギク

Senecio madagascariensis Poir.

特定外来生物
国：緊急対策外来種
県：重点対策外来種
(リスト p.24)



生態的特徴

多年生の陸生植物
ほぼ周年開花し、10,000 粒以上結実する
埋土種子をほとんど形成しない
発芽後、6 ~ 10 週で開花する
根茎が残っているとすぐに再生する
アレロパシー活性を有する

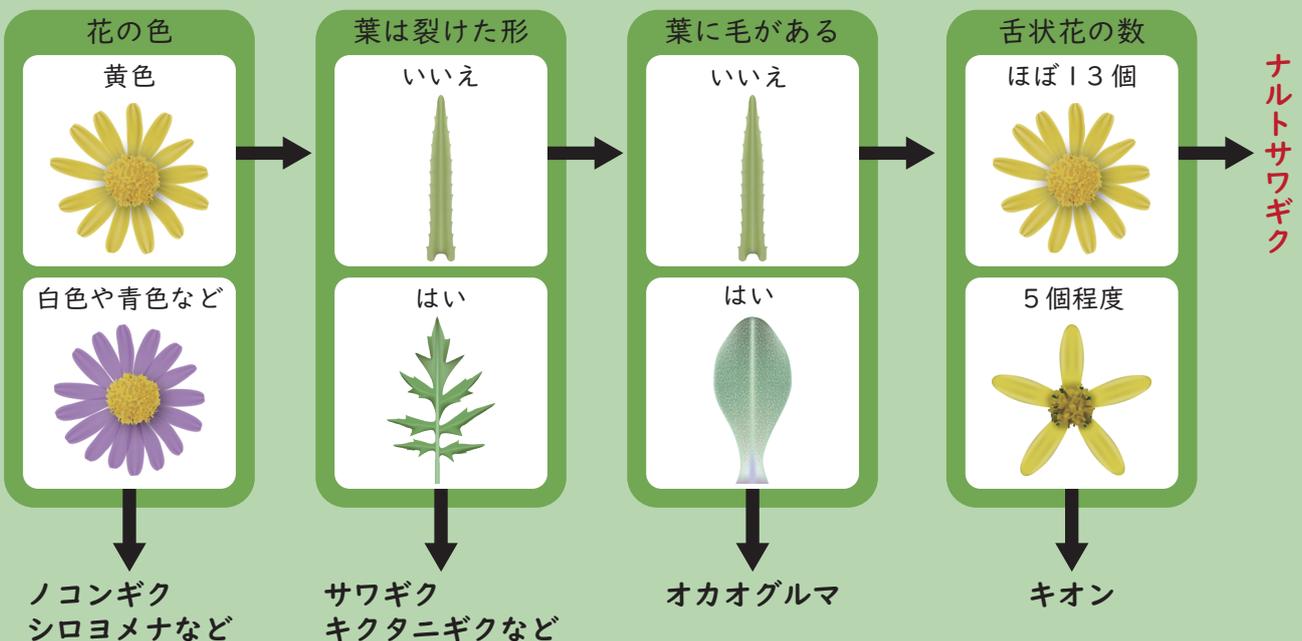
生育環境

海岸埋立地、道端、荒地

影響・被害

在来種との競合、家畜の中毒（ピロリジジン
アルカロイドを含む）

類似種との見分け方



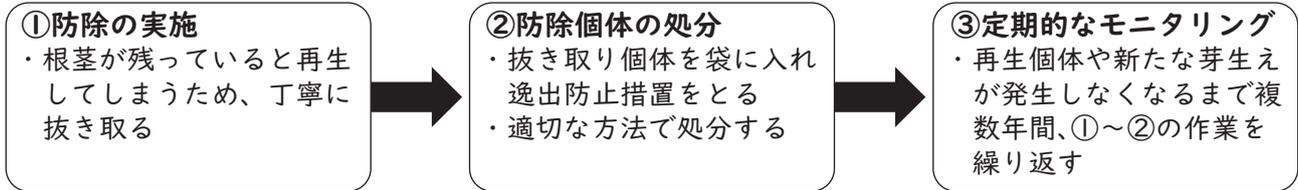
防除方法

*場所、方法等によっては防除を実施することができない場合があるため、福岡県環境部自然環境課または各市町村に問い合わせる

抜き取り

最も効果的な防除方法。根茎を丁寧に抜き取ることで、個体数（株数）を減らすことができる

防除効果	◎	高い防除効果がある
費用・労力	△	多大な労力を必要とする 小面積地での作業に限られる
その他	—	特になし



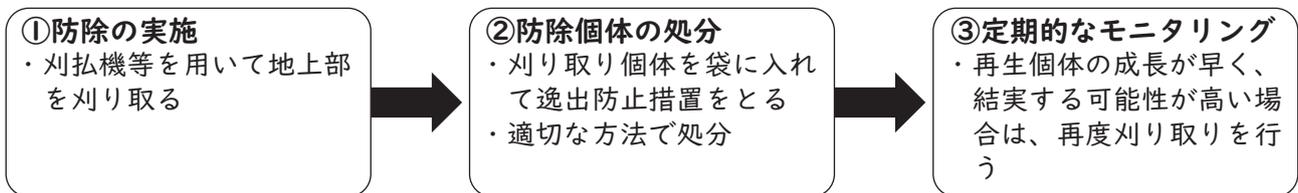
*根は浅く、容易に抜くことができる

POINT 通年開花・結実しているため、抜き取ったらすぐに袋に入れて種子の逸出防止措置を取る

刈り取り

1回だけの刈り取りはほとんど効果がないため、年に複数回実施する必要がある

防除効果	○	年に複数回の実施で密度低下が期待される
費用・労力	○	労力は少なくて済む ○ 生育面積が広い場合に有効
その他	△	在来種と一緒に刈り取ることで悪影響を及ぼす



POINT 高頻度の刈り取りを実施するため、在来種への影響を慎重に見極める

防除に適した時期

通年。夏季（7～9月）に成長が鈍化し枯死率が高くなる可能性があると考えられるが、本県での実状は不明であり今後の検証が必要である。

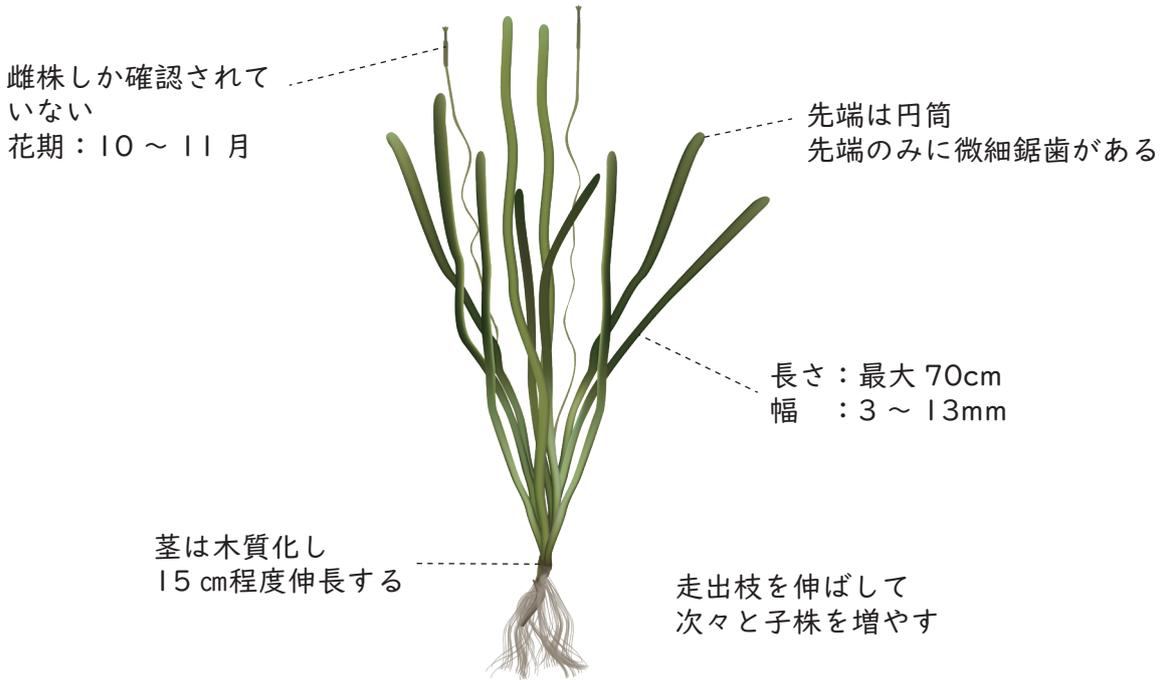


* ①：抜き取り、②：刈り取り

コウガイセキショウモ

Vallisneria × pseudorosulata S. Fujii et M. Maki

国：重点対策外来種
県：重点対策外来種
(リスト p.24)



生態的特徴

多年生の沈水植物
走出枝を水底の地中に伸ばして分布を拡大
密に群生する

生育環境

河川、クリーク、水路、ため池

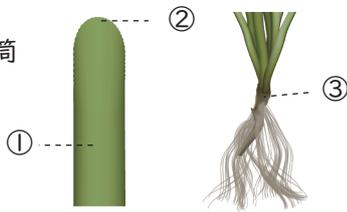
影響・被害

在来種（水生植物）との競合、在来種（セキショウモ）との交雑

類似種との見分け方

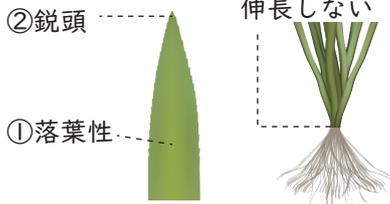
コウガイセキショウモ

- ①常緑性
- ②葉の先端は円筒
- ③茎は木質化し伸長する



セキショウモ

- ②鋭頭
- ③茎は木質化・伸長しない



紛らわしい外来水草

コウガイセキショウモは、在来種のコウガイモと外来種のセイヨウセキショウモとの雑種を起源とする外来水草であり、2016年に新分類群として記載された。コウガイセキショウモは、国内で交雑したものではなく、国外で交雑した個体が、セイヨウセキショウモと混同されて観賞用水草として流通し、それが逸出したと考えられている。

コウガイセキショウモは、様々な地域で絶滅危惧種となっているセキショウモと誤認されることが多く、在来種の復活事例として報告されることがある紛らわしい水草の一つである。そのため、在来種を適切に保全するためにも、コウガイセキショウモをきちんと見分けられるようになることが大切である。

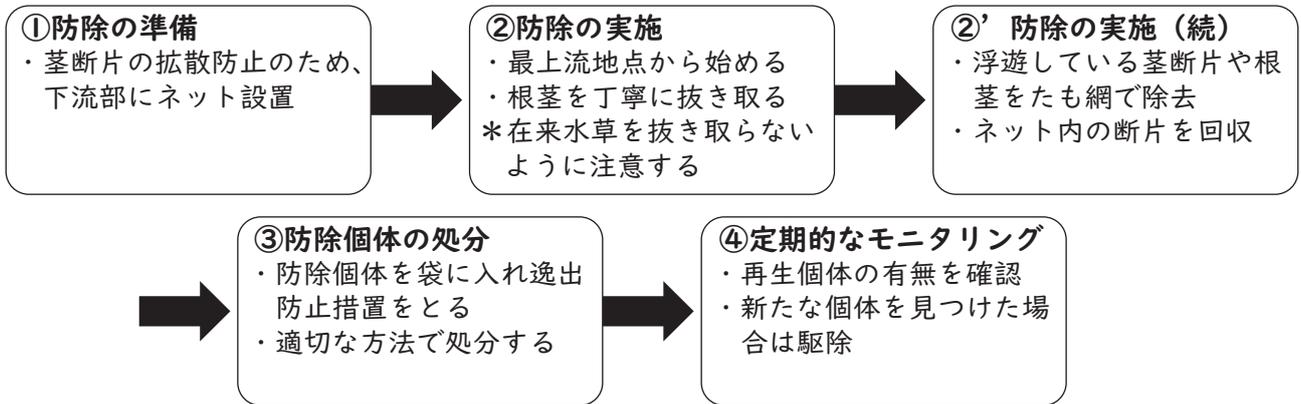
防除方法

*漁業権漁場では、漁業協同組合と十分に相談の上で計画する。
また、場所、方法等によっては防除を実施することができない場合があるため、福岡県環境部自然環境課または各市町村に問い合わせる

抜き取り

一般的に行われている防除方法であるが、ちぎれやすく取り残しが多いため、取り残しの確認を行うことが重要

防除効果	○	高い防除効果があるが、根茎が残っていると再生する
費用・労力	△	重労働であり大面積での作業は困難
その他	△	茎断片が流下して分布拡大しないように注意する必要がある

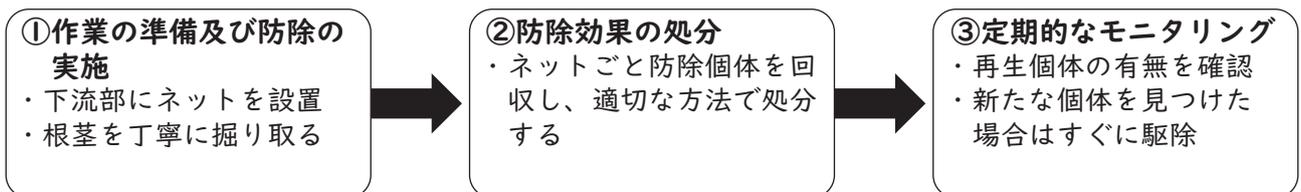


POINT 茎や根茎はちぎれやすく再生能力が高いため、毎年駆除する

水堀り

ポンプの水流により除去する方法。一般的に農作物の収穫に用いられているが、外来水草の防除にも応用されつつある

防除効果	◎	高い防除効果が期待される
費用・労力	△	大型のコンプレッサーが必要であり、費用・労力が大である
その他	×	農業用エンジンポンプを利用した手法の開発が進んでいるが、現時点では未確立である



*水堀りは、抜き取りに比べて、茎や根茎がちぎれにくい傾向があり、断片拡散による分布拡大のリスクが低いと考えられる

防除に適した時期

冬季（12～3月）。冬季は類似した在来種の大部分の葉が枯れているため、本種だけを確実に防除することが可能である。



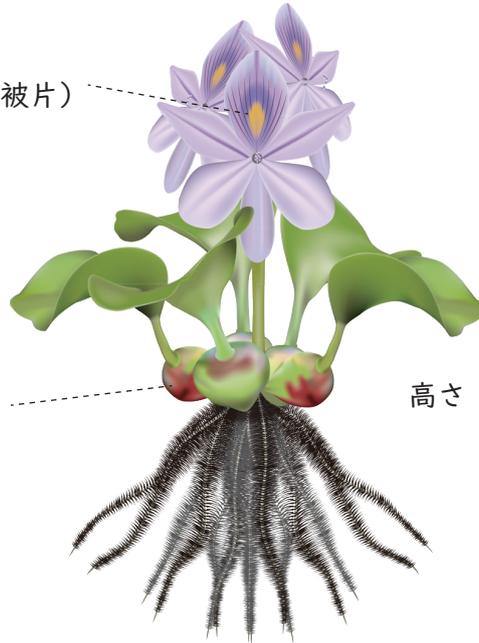
* 抜：抜き取り、水：水堀り

ホテイアオイ

Eichhornia crassipes (Mart.) Solms

国：重点対策外来種
世界ワースト 100
日本ワースト 100
県：重点対策外来種
(リスト p.25)

花期：8～10月
1枚の花びら（上側の花被片）
に黄色い模様



葉のつけ根が膨らんで
浮き袋になる

高さ：10～80cm

走出枝を伸ばして
次々と子株を増やす



密生時、葉のつけ根
は膨らまない

生態的特徴

多年生の浮遊植物
冬季は葉が枯れるが完全には枯死しない
走出枝を伸ばして増殖し水面を覆いつくす
アレロパシー活性を有する
放花昆虫が少なく結実率は低い
種子の寿命は14～20年以上

生育環境

河川、クリーク、水路、ため池、湖沼

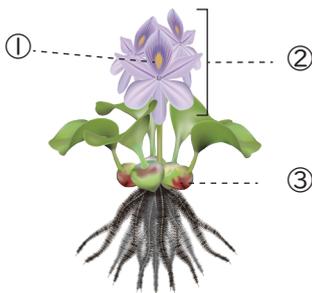
影響・被害

在来種（水生植物）との競合、水生動物の
生息環境悪化、通水阻害、水質悪化

類似種との見分け方

ホテイアオイ

- ①花の模様：黄色の模様
- ②花：花序をつける
- ③花の位置：葉より上
- ④葉：付け根が膨らむ



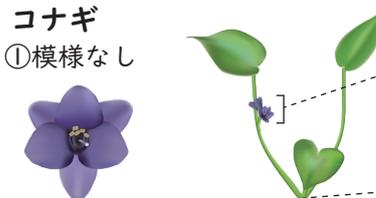
アメリカコナギ（外来種）

- ①模様なし
- ②単花
- ③葉と同じ
- ④膨らまない



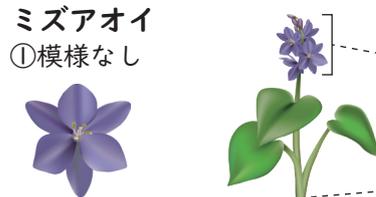
コナギ

- ①模様なし
- ②花序
- ③葉より下
- ④膨らまない



ミズアオイ

- ①模様なし
- ②花序
- ③葉より上
- ④膨らまない



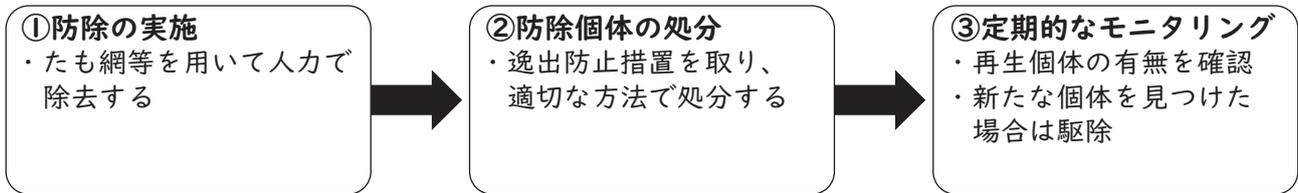
防除方法

*漁業権漁場では、漁業協同組合と十分に相談の上で計画する。
また、場所、方法等によっては防除を実施することができない場合があるため、福岡県環境部自然環境課または各市町村に問い合わせる

水揚げ

浮遊植物の防除に一般的に用いられている方法であり、たも網などを使って除去する

防除効果	◎	高い防除効果がある
費用・労力	△ △	多大な労力を要する 小面積の防除に有効
その他	-	特になし



*必要に応じて、下流部に拡散防止用のネットを設置する

POINT 種子寿命が長いことから、長期的な監視及び駆除が必要である

駆除だけでなく、啓発に力を入れることが重要

ホテイアオイは、その侵略性の強さから、国際自然保護連合（IUCN）や日本生態学会から世界及び日本の侵略的外来種ワースト 100 に、国から重点対策外来種に選定されている。しかし、既に広範囲にまん延しているため指定の緊急性は低いなどの事情により、特定外来生物には指定されていない。現在でも、流通・販売・栽培等は禁止されていないため、人が遺棄したと思われる事例が後を絶たない。こういった状況を打破するために、佐賀県等の一部の自治体は、条例で野外に放つこと等を規制しているが、流通や栽培自体は禁止されていない。そのため、外来種被害予防三原則（p.8 参照）の啓発に力を入れることで、新たな逸出を防止することが重要である。

防除に適した時期

春季の防除は、繁殖防止の観点からだけでなく、冬季に葉が枯れることから、効率的な駆除が可能である。ただし、枯死個体が悪臭や水質悪化の原因となるため、特に民家の近くでは、秋季の防除も実施することが望ましい。



* 揚：水揚げ

ボタンウキクサ

Pistia stratiotes L.

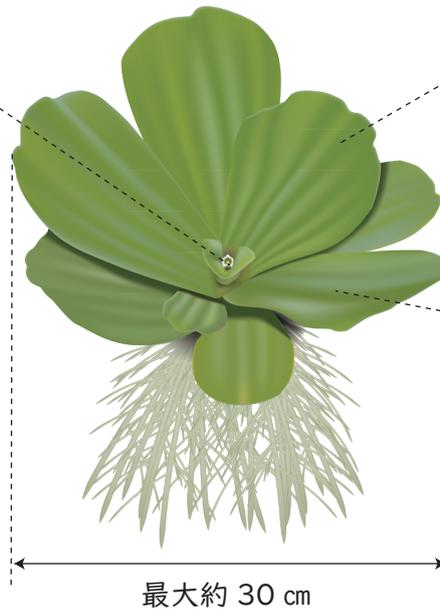
特定外来生物
国：緊急対策外来種
日本ワースト 100
県：重点対策外来種
(リスト p.25)

花期：7～10月

葉の長さ：10～30cm
葉の幅：5～20cm

葉柄はない
ビロード状の短い毛が密生し、
水をはじく

走出枝を放射状に伸ばして
増殖する



最大約 30 cm

生態的特徴

多年生の浮遊植物

耐寒性は低く、冬季に枯死が発生する
水温 10℃(平均水温 12℃) 以上で越冬可能
栄養繁殖が旺盛で水面を覆いつくす
種子繁殖を行ない埋土種子を形成する
アレロパシー活性を有する

生育環境

クリーク、水路、河川、ため池

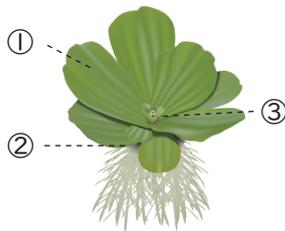
影響・被害

在来種(水生植物)との競合、水生動物の生息環境悪化、通水阻害、水質悪化

類似種との見分け方

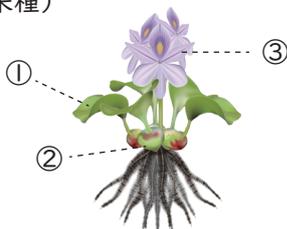
ボタンウキクサ

- ①葉に毛：ある
- ②葉柄：ない
- ③花の色：白色



ホテイアオイ (外来種)

- ①葉に毛：なし
- ②葉柄：膨らむ
- ③花の色：紫色



異なる系統の侵入と侵略性

ボタンウキクサは、1920年代に観賞用水草として持ち込まれたが、侵略的外来種として問題化したのは1990年代からである。それぞれの年代に持ち込まれたボタンウキクサには形態的な差異があるとされており(岡田ら2007、2009)、別系統のボタンウキクサが新たに侵入したことで問題が生じるようになったと考えられている。

同様の事例は、害虫のタバココナジラミなどでも指摘されており、現在問題になっていない外来種であっても、別系統の個体が新たに侵入することで問題化する可能性がある。そのため、すでに定着している外来種であっても、新たな個体の侵入を防止することは重要な意味をもつといえる。

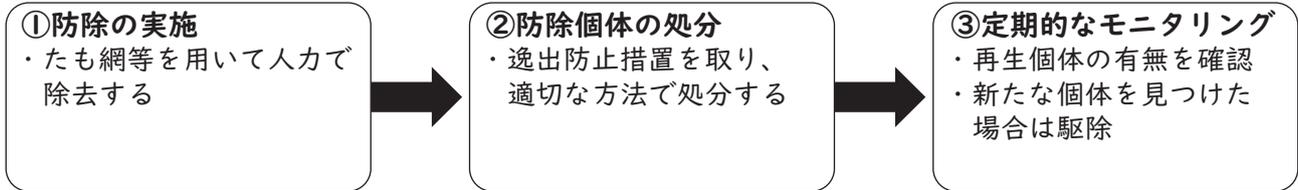
防除方法

*漁業権漁場では、漁業協同組合と十分に相談の上で計画する。
また、場所、方法等によっては防除を実施することができない場合があるため、福岡県環境部自然環境課または各市町村に問い合わせる

水揚げ

浮遊植物の防除に一般的に用いられている方法であり、たも網などを使って除去する

防除効果	◎	高い防除効果がある
費用・労力	△	多大な労力を要する 小面積の防除に有効
その他	—	特になし



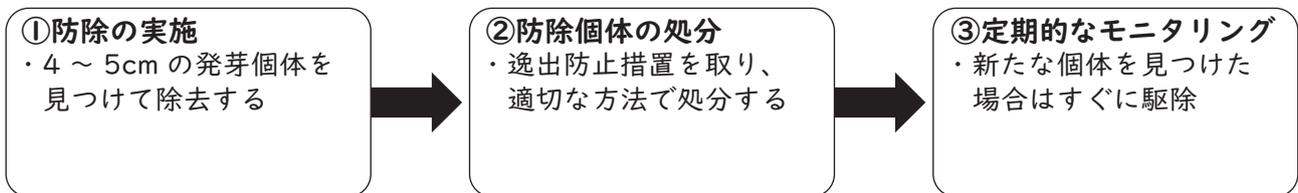
*必要に応じて、下流部に拡散防止用のネットを設置する

POINT 再生個体及び新たな芽生えが発生しなくなるまで、長期的な監視及び駆除が必要である

早期摘み取り

新たに芽生えた個体を早期に除去することで大繁茂を抑える方法

防除効果	◎	高い防除効果がある
費用・労力	○	労力は少なく済む
その他	△	越冬可能な場所では、水揚げによる密度低下を先に行う必要がある



POINT 新たな芽生えが発生しなくなるまで、長期的な監視及び駆除が必要である

防除に適した時期

冬季または初夏。耐寒性が低く冬季に枯死が発生した後に水揚げをするのが効率的な方法である。また、早期摘み取りを行う場合は、発芽時期である6~7月に実施する。



* 揚：水揚げ、摘：早期摘み取り

